

長岡開府400年

vol.6

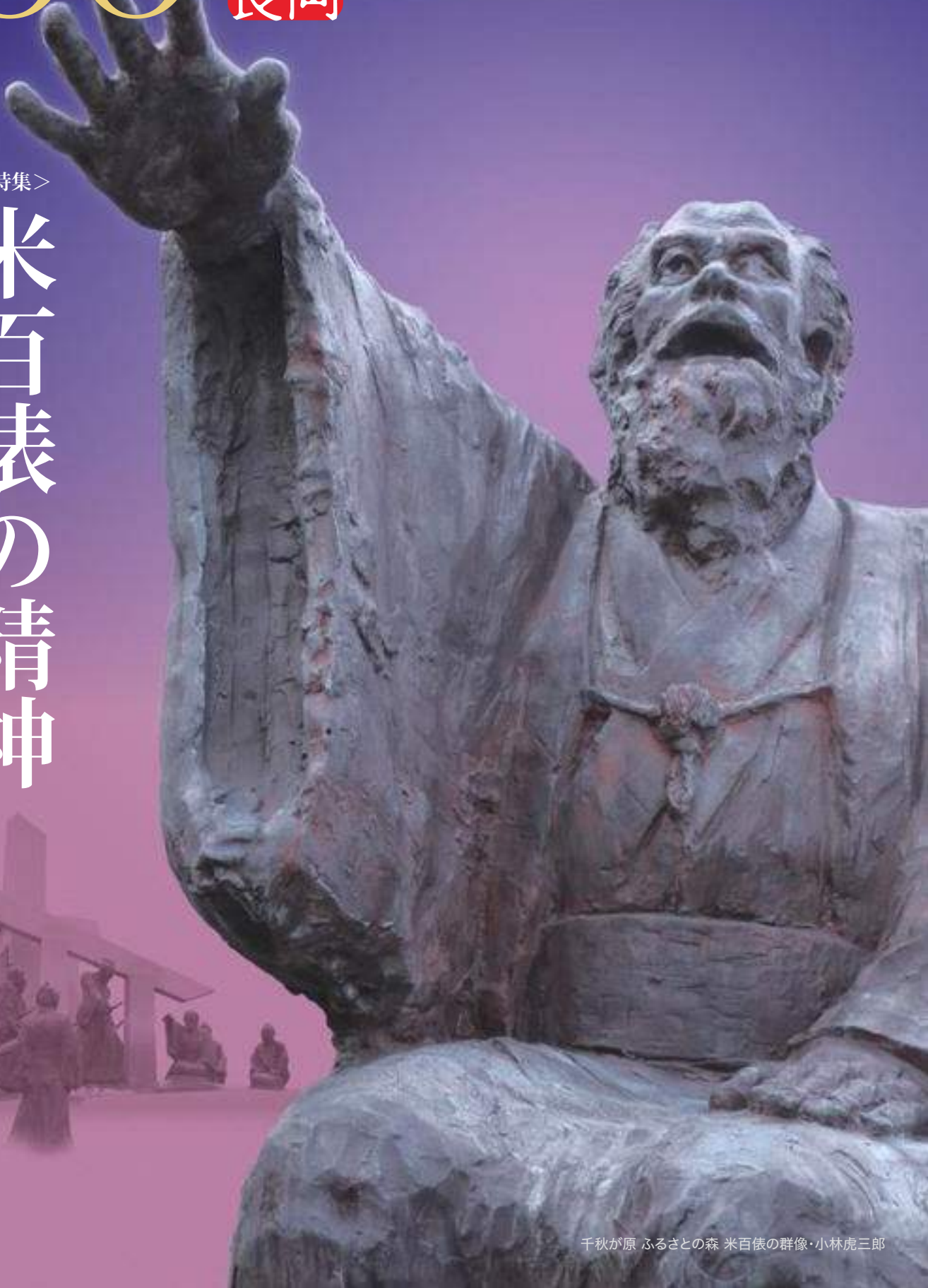
# ROOTS

# 400

越後  
長岡

<特集>

## 米百俵の精神



千秋が原 ふるさとの森 米百俵の群像・小林虎三郎

発刊趣旨  
英語の ROOTS (ルーツ) は、樹木の根や物事の始まりを意味します。  
また、先人や祖先の意味も併せ持ちます。「越後長岡 ROOTS400」は、  
開府 400 年を迎える長岡の歴史を遡り、まちの ROOTS を探ります。



昭和26年(1951)に長岡市公民館で上演された「米百俵」初演

山本有三原作の「米百俵」の演劇が、新潟大学長岡分校演劇研究会主催(演)により長岡で初公演された。  
当時の新潟日報紙の記事によると「食えないからこそ学校を建てるのだ」とさけぶ小林病翁の切々たる郷土愛は復興途上の長岡市民に深い印象を刻んだ」とあり、熱演が市民に感銘を与え大成功した様子がうかがえる。  
会場の長岡市公民館は旧長岡市公会堂(その後厚生会館、現・アオーレ長岡の場所)。



小林虎三郎(こばやし・とらさぶろう)  
長岡藩士。明治維新後の再興長岡藩大参事・文武総督。文政11年(1828)に長岡藩士・小林又兵衛の三男として生まれ、藩校崇徳館の助教をつとめる。藩命で江戸へ遊学し、佐久間象山に学ぶ。吉田松陰(寅次郎)とともに門下生の「二虎」と賞せられるが、幕府の開港政策に反対する建議が藩主に受け入れられず帰藩する。戊辰戦争後、敗北した藩の再建を担い、明治3年(1870)に三根山藩からの救援米を国漢学校開設資金に充てる。明治4年に柏崎県から病氣療養を命じられ、「病翁」と改名。東京へ移り、療養と文筆活動に専念する。明治10年、向島の弟・雄七郎宅で死去。著作に『興学私議』(安政2年)、『小学国史』(明治6年)などがある。



「米百俵」初演当日のしおり  
長岡市長松田弘俊あいさつ文や米百俵上演の趣旨から始まり、演出スタッフ、出演者のコメントなどが掲載された。

### 巻頭言

長岡は四百年の昔から、人間性豊かな人材が輩出するまちです。それに教育が人を育み、産業を支えてきました。幕末の長岡藩士小林虎三郎が唱えた教育第一主義は、戊辰戦争で廃墟となった長岡の町の復興へのともしびとなり、もとは三根山藩からの百俵の米でしたが、その対価で教科書などの教材を揃え、飢えた人びとが協力して国漢学校を創りました。その学校は人づくりをし、一方ではまちに産業(商工業)の振興と実業教育を大切にする思想を生んだのです。作家山本有三さんがその故事をもとに劇曲『米百俵』を昭和十八年(一九四三)に発表していますが、以来、米百俵の精神として、長岡の歴史の誇りとなりました。その精神は、南米のホンジュラスへも伝わり、百俵を超える米百俵学校ができています。長岡が誇る米百俵の教育の精神性と崇高な価値観が、開府四百年を期にあらためて世界中に広がることを期待しています。

長岡開府四百年記念事業実行委員会 会長 磯田達伸



# 小林虎三郎 清夜の吟を詠ずる

天に万古の月あり  
我に万古の心あり  
清夜高樓の上  
欄に憑っていささか襟を開く  
天上万古の月  
我が万古の心を照らす



越後長岡に近代教育を身生えさせた  
幕末の長岡藩士小林虎三郎の人物像を  
紹介しましょう。

虎三郎は、少年のころから、世のため  
人のためになろうという志を持っていました。

そのため、万巻の書を読み

江戸に学問修業にでかけています。

虎三郎の志は

長岡藩という社会からみれば狭いものでした。

ところが、嘉永六年（一八五三）の

ペリー来航によって一変しました。

師の佐久間象山のすすめもありましたが

幕政で決定した開港場の位置について

異論を申し上げます。

日本のために思えばこそ、献言でしたが

思われ排斥にあつて、国元（長岡城下）に

帰ることになってしまいました。

国元では幽囚の生活を送り

寂寥な気持ちとなってしまいます。

人生には、挫折はつきものですが

虎三郎の苦衷は、他の人よりも

はるかに深いものでありました。

しかし、そこでくじけないのが、虎三郎でした。

発症した病軀にむち打って、自己の研鑽に

うちこみ、たとえ、報いられなくとも

みずからを良くしようと努力します。

そのことがやがて、社会全体を

良い方向にかえる原動力になってゆくという

信念を持つことになります。

そのとき、詠じた漢詩が「清夜の吟」です。

自分のその志を知ってくれているのは

満天の星夜のなかで輝く

月のみであるという感懐が

のちに長岡の教育、ひいては日本の

近代教育の礎を築く構想に

つながってゆくことになります。

このイラスト（イメージ画）は、戊辰戦争（西暦一八六八年）以前の長岡城下の夜景を描いています。小林虎三郎が自責の苦悶のなかで、ふと満天の星空に皓々と輝く満月を眺めたときの感懐の漢詩が「清夜の吟」です。

人はどんなに努力しても報われないことが多いものです。虎三郎は少年の頃から、人のためになることを志を持って学問に励んでいました。そのために江戸遊学を果たし、これからいつか江戸帰郷を命ぜられています。ふるさとして、その志を求めようとする、思つようと力を発揮できない自分に腹立つことも多かったといえます。

そのとき、ふと眺めた夜空のもと平和な長岡城下のもとで、我が心を照らしてくれる月光の慈しみを知らる境地に達するようになります。



# 人物を育てる壺

## 東洋の道徳・西洋の芸術思想の普及

江戸木挽町（東京都中央区銀座）の佐久間象山の私塾に、小林虎三郎が移ったのは嘉永四年（一八五二）のことであった。江戸遊学は前年であったから、虎三郎も西洋兵学の指南を受けたきた青年の一人であった。

佐久間象山は信州松代藩士。儒学から洋学を修めた人物として、当代一流の呼び声が高かった。

入門者には幕末維新期に活躍する各藩

の勤皇志士が数多くいる。会津藩の山本覚馬、旗本の勝海舟、土佐藩の坂本龍馬や薩摩藩の西郷隆盛、大久保利通といった錚々たる人材が入塾している。

そのなかで、とりわけ虎三郎と因縁深いのは長州藩の吉田寅次郎（号を松陰）である。吉田は天保元年（一八三〇）生まれ、二人は塾のなかで互いに研鑽して、象門の二虎（昭和六年刊、『長岡市史』）と称されるほどであった。

象山は当時の黒船来航に際し、いち早く見聞し対策を講じようとした人物である。

象山は、東洋の道徳と西洋の芸術の統合をはかり、日本のすすむべき近代的思考を創り出す。すなわち「私の短を補う彼の長をとる」学問を弟子たちに教えている。

なかでも小林虎三郎と吉田松陰は大いに感化を受け、いち早く蘭学・洋学を修め、虎三郎に至っては晩年英語を学び、英文の『教師必読』を校訂するに至っている。

二人は黒船来航を期に師の象山とともに罪を得て、国元に幽閉され、松陰は萩城下の松下村塾で有為な人材を育てあげ、虎三郎は長岡城下で安政六年「興学私議」を著す。

二人の運命がわかるのは、この安政六年（一八五九）である。松陰は斬罪となった。虎三郎はのちに長岡藩大参事となり国漢学校を開校することになる。師の象山は刺客に襲われ生命を落すが、長岡藩士の虎三郎は、藩の未来を憂え、ともに、長岡の教育システムの構築と、日本の近代教育のあり様に、提言をしている。

まさに、近代デモクラシーの発芽である。務を為すとせずに「務を成す」としたところに虎三郎の思いがある。

人は他からうける教育によって成長するものだ。

### 興学私議は人の道を教えた

小林虎三郎は興学私議で、教育を教養として説く。その教養をつぎのように説いている。

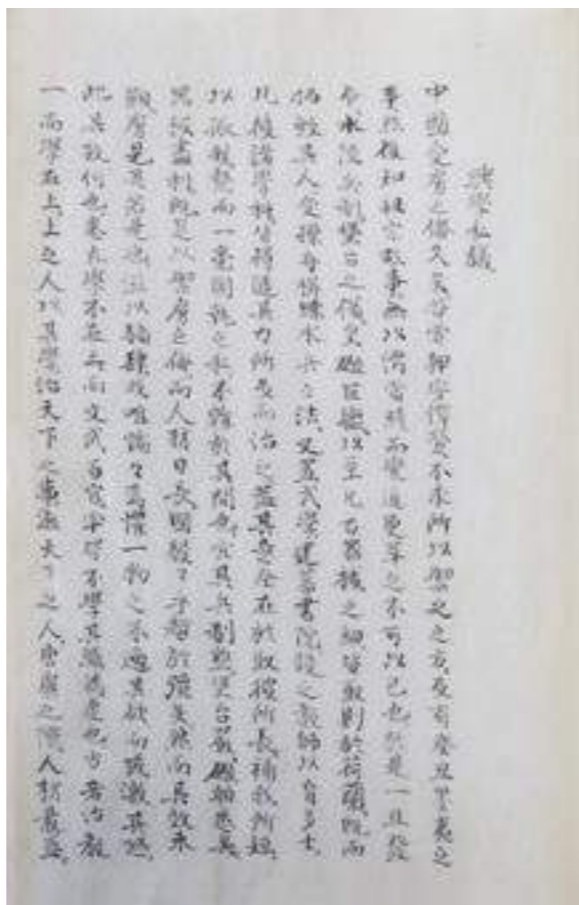
「教養は人の道。つまり道徳を本とし、技術知識を学ぶ」ことだ。つまり教育はみずからを正しくし、世のため人のためになるものだとしている。

教育は、個性、能力をのばす教育と、社会生活を学ぶ二つの教育理念が存在する。虎三郎はまず興学私議のなかで普通教育といわれる『小学』の教えを重んじた。

どんな人間も人生を楽しむすためには、人間性を重んずるものだ。そこに虎三郎が、当時、身分階層がわかれていた士庶（侍と民衆）への深い慈愛の念をみることが出来る。『小学』とは人が生きるうえでの基礎教養を学ぶことである。道徳ともいってよい。

人の道を知るものが、『大学』や専門知識を学ぶことができる。この教育論は展開している。

さて、そういう虎三郎の考え方は、彼の創作ではない。本来、長岡藩の藩校崇徳館教育にあった。その学規に「人の人たる所以の道を講



『求志洞遺稿』（長岡藩儒小林虎三郎の遺稿集）に所収されている「興学私議」の冒頭部分を掲載。明治27年の筆写者不詳の写本。

どりあってくれない提案書のような形であったと思えばよい。

しかし、その内容はきたるべき近代日本の運命を覚つていたごく先見性にとどけられた。

興学私議の評価は、小林虎三郎の学校教育者が実現してゆくなかで、甥たちがまとめた虎三郎の著作集『求志洞遺稿』のなかに発表された。明治二十七年のことであった。

それは没後十七年を経て明らかになった事実でもある。

さて、「興学私議」とはどのような教育論であったのだろうか。その内容は緻密で深遠、短文にして明解なものであるが、紙面の都合で大意にしばらくざるを得ない。

「学を興し、材を育し、以て経綸の務

学を興し材を育す

### 教育論の原点

安政六年（一八五九）三月、小林虎三郎は「興学私議」という教育論を書きあげる。その教育論は、のちに、長岡の近代教育、ひいては日本の教育に大きな影響を与えるものとなった。

そもそも興学私議とは私的な上申書である。藩庁（政府機関）へ提出しても、



佐久間象山が小林虎三郎に送った書簡

明して、その身を修め、しこうしてのち、他の人びとにおよぼさなくてはならない。ただ詞章をつくり、声誉を釣り、利禄を取るのみではない（現代訳）とある。

### 人主の学が産業を興す

「興学私議」には当時、禁句ともいえるべき言葉が載っている。「人主の学」である。当時も今も人主は君主（殿様）であるといわれている。

まず、虎三郎は「君の職は至って重し、しこうして人、生まれながらにして貴き者はなし」と前置をし、君も士、庶人の子と同じく大学に入るとしている。

考えてみれば君主とて、人の子であるから、勉強をしなければ、指導者にはなれないだろうと虎三郎はいう。

とすれば、人としての道を学び、政治技術を駆使する人こそ、人主であることになる。まさに人こそが主であり、この世を動かす大きな力となると主張した。

それは興学私議の骨格を為すもので、すなわち人材が百工を生かし、地域の商工業をさかんにすると述べるに至るのである。

人材を育てることは、産業を振興し、地域社会を豊かにし、人びとは幸福な人生を送れるということにつながる。

政り事の上に教育を置く。学政一致を虎三郎は理想の地方創生の切り札とした。それは長岡の人びとの価値観を変えたので、その後、長岡人の教育第一主義をいわれるようになった。



# 現代に生かせる

## 小林虎三郎の知恵

歴史は現代社会に生かしうるものである。山本有三が書いた戯曲『米百俵』にも、多くの学びが散りばめられている。

「食わなければ、人間、生きてはゆけない。けれども、自分の食うことばかりを考えていたのでは、長岡はいつになっても立ちなおらない」

支藩三根山から送られた百俵の米が学校の為に使われると知り、いきり立った藩士たちが小林虎三郎の邸に踏み込む。その時に虎三郎は、困窮する藩士たちの立場に理解を示しながら、長岡復興における教育の必要を、情理を尽くして説く。実のところ、百俵の米のみで食いつなげると考えるほど長岡藩士は愚かではない。彼らが求めたのが、武士の面目の維持であるならば、世のための働きを示すことでそれが叶うだろう。

翻って現在に照らせば、リーダーを自認する者みずからがリスクを選

び、仲間をよく導き、公益のために働くべきと考えられる。ところで小林虎三郎は、生前にも没後にもただちに業績を讃えられることが無かった。しかし現在は、挑戦者を大いに讃える社会でありたい。

「国がおこるのも、ほろびるのも、町が栄えるのも、衰えるのも、ことごとく人にある。だから、人物さえ出てきたら、人物さえ養成しておいたら、どんな衰えた国でも、必ずもり返せるに相違ないのだ」

戯曲の中で小林虎三郎と対立する長岡藩士たちに、それぞれの子どももの存



戯曲『米百俵』は昭和18年(1943)『主婦の友』1、2月号で発表された。資料提供 主婦の友社

在が象徴的に書かれている。藩士たちは武士であるとともに父親であり、彼らの将来のためにも小林虎三郎の施策が生かされる。  
現在も私たちが育むべき「人物」とは、未来を担う若者である。その為のインフラ整備は、これからも大いにされるべきではないか。

米百俵の群像「小林虎三郎」像(部分)

# 患をみつめる眼力



経世済民が虎三郎の主張の基本  
小林虎三郎には、敗者の事情を冷徹にみつめる眼と、その敗者に温かいまなざしでみる慈愛の眼の二つが同居していた。

敗者は、最初から決まっていたわけではない。運命、人の感情、社会、制度などが混交して、結果的に敗れる例が多いことを、幽閉中に読んだ『日本外史』や『日本政記』などから知識を得ていた。

しかし、虎三郎は敗者の問題を鋭

うとしていたなかで、明体達用の学を

さらに幕末日本が外国の力に屈しよく指摘し、検証し、今後、同様の事件が起つたらどう改めてゆくかを考えていた。

### 小林虎三郎の教育思想

同時に、学政の一致を説き、総合的教育と社会的弱者の救済を掲げている。また教育は習熟度により、次第にレベルをあげて大学院のようなものをつくらなければ、日本の国力の低下を招くことも警告している。

普及させなければ、日本の危機は去らないとしている。その洞察は鋭いものがあった。

小林虎三郎の儒学的思想の中心は朱子学であることは論をまたないが、長岡藩校が開校当初から、授業においては、古義学も勉強していた。のちには、蘭学、英学、陽明学、国学に至るまで、あらゆる知識を修めている。だからこそ患をみつめる眼は鋭いものがあった。しかし、そのルーツは経済であった。戦禍によって飢えた長岡藩が経済復興を第一にしようとした際、盟友の三島億二郎とともに教育の復興を第一義として、経世済民をはかったことは、慧眼であった。

## 藩校 崇徳館から 国漢学校へ

### 教養広し 人材育す

江戸時代の諸藩は藩士子弟の教育機関として藩校(藩立学校)の設立に乗り出す。長岡藩校崇徳館の創設は文化五年(一八〇八)。九代藩主牧野忠精の治世である。幕府の老中として在府が多かった忠精だが、藩政においても大きな成果を残している。崇徳館の校名は、中国の古典『易経』の「先王以て楽を作り徳を崇び、殷にこれを上帝に薦め、以て祖考を配す」から。

戊辰戦争敗戦後の明治二年(一八六九)、長岡城下は窮乏に喘いでいた。復興を託された虎三郎や三島億二郎が東奔西走し、四郎丸村昌福寺を仮校舎に藩立国漢学校が産声を上げる。

翌年六月、国漢学校は坂之上町二七番地に移転開校する。同時に洋学局と医学局などが設けられる。明治維新政府の教育政策に即応したものであった。

国漢学校では従来の漢学に併せて国学を教えた。世界の出来事や科学技術も。大日本史や日本外史、四書五経や中国の史書、地球説約(地理書)、窮理書(物理書)、博物新篇その他の技術書を教科書にして。崇徳館時代の教育方針が一変した。不遇の時代、虎三郎が「興学私議」で説いた教育改革論、国漢学校こそは、自らの手によるその実践であった。

## 人を育てる歴史教育の教科書をつくった

### 『小学国史』の刊行

日本の歴史を学ぶことを大切にしたい小林虎三郎には、ふるさと長岡を愛する気持ちが人一倍強かった。パトリオットといえは愛国者をさすが、民族のアイデンティティーを誇りに思わない人間はいないだろう。

それは郷土の教育や日本の歴史、世界の歴史から学ぶ人材教育であった。

小林虎三郎が上京して一番最初に手掛けた執筆は、明治五、六年につぎつぎと発刊した『小学国史』全十二巻である。国文と漢字の交じった日本で始めての歴史教科書の刊行は、日本の未来を見据えた刊行であった。そもそも『小学国史』とは小学校の歴史教科書という意味ではない。儒学の「小学」を基礎にし、日本の歴史を記述したものである。すなわち、日本の価値観の変遷を時代毎に書き記していったものだ。そこから長岡や日本の未来が見えてくるものだ。



『小学国史』表紙

小林虎三郎の手録によれば、明治2年6月に安政3年(1856)から病を患ってから苦節13年の思いを記した「隱憂の賦(いんゆうのふ)」。みずからの運命をさと、「素志の伸ぶるなきをいたむ」と述べている。



## 動乱の世に貫いた志

小林虎三郎の父又兵衛は、天保九年（一八三八）に新潟で佐久間象山と出会っている。「虎三郎の教育を託すのはこの人物の他にいないと思った」と又兵衛は後述している。

藩校崇徳館で頭角をあらわし、藩命による江戸遊学で佐久間象山からもその才を認められた虎三郎の前途は、泰平の世であれば明るいものだったであろう。不幸にも虎三郎は、ペリー来航により混乱する幕府の動乱に巻き込まれた。失意のまま帰国した彼は、長岡でさらに病魔にも侵される。これからの活躍が囑望される二十歳の若さであった。

地位も健康も失った幽閉生活の中でも、虎三郎は志だけは失わなかった。求志洞と名付けた屋敷でみずからの知識、人格を磨くことに努め、教育による国の発展を常に思考していた。

戊辰戦争の時は、藩主と行動をともにし、長岡城落城の後は会津若松に逃れた。敗戦後、雪の長岡城下に帰還した際に有名な「南天一望」の詩を詠んでいる。明治二年（一八六九）八月、虎三郎は三島億二郎と牧野頼母の三人で長岡藩の復興について協議を行い、彼自身は文武総督に就任した。

三根山藩から百俵の米が送られた明治三年（一八七〇）、六月十五日に念願の国漢学校を開校。学校内には洋学局、兵学局、医学局、演武場等の施設が設けられ、虎三郎の教育思想が色濃く反映された。しかし、その年の十月に長岡藩は廃藩となり、宿願であった長岡藩の教育改革はわずか一年余りで終わった。



小林虎三郎書 七言絶句  
戊辰戦争敗戦後に雪の長岡城に帰還する途中、はるか長岡城下を遠望した際に悲嘆した気持ちを詠んだものといわれている。  
南天一望上高台 十世城楼已作灰  
指点故山近在眼 雲容樹色不堪哀  
「南の空を見渡して高台に上った。いつもあった城郭は燃え落ち、今はない。いちいち指さしてみる故郷の山はすぐそこにある。雲の形も木々の色も深い哀しみにつまれている」



小林雄七郎(1845~1891)  
虎三郎の実弟。慶応義塾で学んだ後に官吏となり、明治23年(1890)第一回衆議院議員選挙に当選した。彼もまた後輩の育成に尽力し、明治8年(1875)に長岡出身者の育英団体「長岡社」を創設している。

その後、国漢学校は長岡藩が編入された柏崎県の附属教育機関のひとつとなり、新政府の学制に組み込まれる。自らの理想とする教育と異なる姿に虎三郎は深く落胆し、新政府から与えられた学校並演武場掛という職は早々に辞した。明治四年（一八七二）八月、虎三郎は、実弟小林雄七郎を頼って東京に移り、その年の冬から翌年にかけては高知をたずねた。この頃、病身からみずからを病翁と改名している。南国・高知で英気を養った虎三郎は、明治五年（一八七二）に東京に戻り、向

## 虎三郎の足跡

島雄七郎邸にて執筆活動に入る。明治六年（一八七三）には『小学国史』全十二巻を、翌年には『德国学校論略』を出版した。人生において貫き通した教育第一主義の思想を、これからの国を担う人びとに伝えたい、という先駆者の最後の情熱がそこにはあった。明治十年（一八七七）七月、伊香保温泉にて静養していた虎三郎は、病状が急変し、同年八月二十四日に東京・向島で没する。享年五十歳。

虎三郎が去った後の長岡の復興は、士族出身の三島億二郎とともに町人出身の岸宇吉や渡辺六松といった人物が中心となっていた。彼らは戊辰戦争以前に虎三郎からアラビア数字を教わり経済学を学んでいた。このことが商売において利益を生み、経済復興の面で大いに役立った。実学の重要性を早くに虎三郎から学んでいた彼らは、勉強会を重ねてその後の長岡経済界を力強く牽引して行くこととなる。

藩政の表舞台に立つ期間は短かった虎三郎であるが、彼の志は、彼が去った長岡でも確実に後輩に受け継がれていった。小林虎三郎の墓は、死後長らく東京の谷中墓地にあったが、昭和三十四年（一九五九）に、郷土長岡でその遺徳を偲ぶため、菩提寺の興国寺に改葬された。

# 近代日本の教育 提言

## 先進的な近代教育志向

教育にはすぐれた教師と学校施設が必要だ。教育理念や知識の向上、技術、文化の向上も教育の範疇に入るだろう。

アメリカの教育書『教師必読』が虎三郎校訂でファン・カステールが翻訳して刊行されたのは明治九年（一八七六）七月のことである。

虎三郎が没する一年前のことである。同時に虎三郎はイギリスの女児教育書『童女塾』の校訂も手掛けており、のちに長岡の女子教育が大いに進展する要素を創りあげている。

また虎三郎が入手した漢書の『德国学校論略』には、当時、伸長いちじるしいプロイセン（のちのドイツ）の教育制度が、虎三郎の翻訳によって紹介されており、それは明治七年（一八七四）の十月のことであった。

その序文の冒頭に「地民を生じ、民あつまりて一大団と為る。是れを国といふ。民はすなわち国の体なり。ゆえに民強ければ、すなわち国強く、民弱れば、国、弱し」とし、「民にして果してよく学に励み業に勉めれば強となる」と説いている。国力は国民の人間力だと説いて



小林虎三郎が翻刻出版した『德国学校論略』

ているところに、従来からの人材の育成の方針が継承されている。

また四子六経のうち「礼楽」（楽経）を重んじた。「丹青院」（のちの美術学校）や音楽院（のちの音楽学校）は精神文化の向上に大切だと説いた。師道院はのちの師範学校。宣道院は宣教師を養成する学校のことも、虎三郎は紹介している。

特筆すべきは女学院と聾啞教育をする学校や、夜間学校の「実学院」まで紹介している。

これらは郷土長岡において、中等教育の充実や女子教育に力を注ぐことにもつながり、また芸術性の高い文化人を輩出、聾啞教育の先駆につながったことを特筆すべきである。



片山翠合画『北越雪中実景』の「阪之上小学校児童雪合戦の図」



# 長岡市民になったお殿様

No.6

## 牧野家第十七代当主牧野忠昌氏寄稿

### 牧野家の歴史

三河の戦国半久保城時代は、初代牧野保成、二代成定、三代康成がそれぞれ現在の豊川市及び豊橋市一帯を治めていた。成定は武将として優れており、「牛久保の壁書十八カ条」を制定し、武士の心得を示し守らせた。その第一条には「常在戦場」を掲げ、牧野家臣団は、この精神を守り、幕末に至るまで守られることになった。また、徳川家康に帰属し、東三河譜代の大名となる布石となった。康成は徳川家康のもと各地を転戦し、数々の戦功をあげている。天正十八年（一五九〇）の小田原城攻めに参戦したのち、家康の関東移封に伴い上野国大胡（現在の群馬県前橋市）二万石の城主となるが、関ヶ原の戦いの際と没した。康成の後、忠成が二代大胡城主となり、大坂冬の陣、夏の陣いずれにも参戦し、奮闘力戦した。その戦功により越後長峰に五万石を与えられた。その後、越後長岡に六万二千石（のち七万四千石）で移封され、幕末まで牧野は続いた。

私が初めて武者行列に参加したのは今から二十一年前、平成八年八月二日で、当時は長岡まつりの行事であった。私が初めて馬に乗ったのはこの時である。この日は朝から快晴で、真夏の炎天下、市役所から大手通りにあるメイン会場まで行進した。途中明治公園で休憩し、馬も参加者も水分を補給したり、あめを頂いたりして一息ついた。「暑い中を苦勞様です。さぞ暑かったでしょう」とねぎらいの言葉をかけて頂いたが、馬上は意外に風が通り、私は思ったより暑くなかった。けれども、熱された舗装道路を歩く武者姿の方々は、わらじを通して足の裏から暑さを感じたり、道路の照り返しを受けたり、相当厳しかったのではないかと思った。

第1回米百俵まつりで牧野忠成公に扮する筆者



### 現代に生きる牧野ファミリー

平成十四年第一回米百俵まつりでは騎馬ではなく、牧野忠成公役で輿に乗って参加した。この時は髷のかつらをつけ、顔化粧をして頂いた。どららんをしっかり顔に塗られたので、後から拭き取るのが大変であったことを覚えている。

### 長岡開府四百年記念事業

## 次の百年へ新しい米百俵

### 長岡開府四百年記念事業 スタートします

平成三十年の長岡開府四百年に向け、十月から記念事業がスタートします。勇壮・華麗な時代絵巻を繰り広げる「米百俵まつり」と連携した企画や、日本文化体験イベント「長岡藩主牧野家ゆかりの伝統文化」などを皮切りに、改めて長岡の歴史や文化、伝統を見つめ直す事業を展開します。

開府四百年をオール長岡で盛り上げていきます。また、市民企画実施事業（平成二十九年年度分）には、市民の皆さんの熱意やアイデアの詰まった多くの応募がありました。現在、助成対象となった団体が事業実施に向けて動き出しています。米百俵の精神は、次の世代を育成することの重要性を説いたものでもありません。開府四百年記念事業では、地域の未来を支える子どもたちの参加を含め、「次の百年へ 新しい米百俵」をキャッチフレーズに、今後も未来志向の事業を展開していきます。

### 長岡開府400年記念事業への ご寄附をお願いします

長岡開府400年記念事業実行委員会では、100年先を見据えた「まちづくり、ひとづくり」を応援するため、未来投資基金を募集しています。長岡が誇る米百俵の精神を次代に継承するとともに、「新しい米百俵」と呼べるような教育、人材育成にむけた取り組みをすすめてまいります。この事業の趣旨にご理解をいただき、ご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

●ご寄附のお申し込み・お問い合わせは事務局  
長岡市政策企画課 開府400年記念事業推進室  
TEL.0258-39-2395へお願いします。

口座名義：長岡開府400年記念事業実行委員会  
金融機関：北越銀行長岡市役所支店  
口座番号：2027262

## 阪之上小学校 伝統館

阪之上小学校の伝統館入口には「米百俵の群像」が象徴的に展示されている。これは、彫刻家元井達夫氏の「歌舞伎で演じられた戯曲『米百俵』のクライマックスシーンを銅像にした」という想いから生まれた作品である。平成三年（一九九一）に千秋ヶ原に完成した「米百俵の群像」の制作前に造られた、正に原型である。



「米百俵の群像」の原型

背景の刀を象徴する石柱の前で鬼のような形相で迫る藩士たち。鬼気迫る迫力で説き伏せる虎三郎、それをじっと見つめる少年。「米百俵の精神の継承」を表現した作品が見る者を圧倒する。

阪之上小学校の「伝統館」は、「米



阪之上小学校 伝統館  
開館時間/AM9:30~PM4:00  
休館日/土・日・祝日及び年末年始  
所在地/長岡市今朝白1-11-21  
電話/0258-32-2134  
入館料/無料

中央には戊辰百二十年にあたる昭和戊辰の年、昭和六十三年（一九八八）に制作された四五〇分の一の長岡城復元模型が展示されている。視線を落とすと緑豊かな城下町長岡が望める精巧なつくりである。

小林虎三郎、三島億二郎等の業績を知ることができ、国漢学校で学び多大な業績を残した渡辺廉吉、小金井良精、小山正太郎に関する資料や当時の教科書が並び、阪之上小学校の卒業生、山本五十六に関する資料も展示されている。

## 入徳館野外 研修場

三根山藩は寛永十一年（一六三四）に誕生している。長岡藩の初代藩主牧野忠成が四男定成に、藩領から六千石（現在の新潟市西蒲区峰岡）を分知し立藩した。

天保年間（一八四〇頃）三根山藩は藩士子弟の育成に力を注いだ。長岡藩校崇徳館の助教を務めた神戸武正を家老に登用するなど、文武教育の体制を整えている。

維新後、十一代藩主忠泰が、維新前からあった学問所や武芸の稽古場などを統合整備し「入徳館」を設立する。長岡藩が三根山藩から送られた「米百俵」を、国漢学校の開設資金に充て、教育環境を整備したことに倣ったものともいう。校名の由来は、中国の古典『大学』の「初学徳に入るの門なり」から。

藩主忠泰は、漢学や日本の古典に優れた気鋭の学者新保正与を入徳館の大教授として招聘、藩主自ら率先して学んだという。

教育内容は、中国・日本の古典や歴史にはじまり洋学、算術、剣・槍・弓・馬術、水泳、砲術、操船術など、まさに文武両道である。珍しいこ



三根山藩址公園内に立つ米百俵の碑  
昭和59年11月、三根山藩開府350年を記念して建立された。

ろではフランス式のラップ師が招かれていた。

明治以降、全国には伝統ある藩校の名を校名として引き継いだ学校が少なくない。三根山藩校入徳館も、巻町立入徳館小学校（昭和五十三年に閉校）として地域の歴史に刻まれている。

現在、角田山を望む峰岡の地には、新潟市の「入徳館野外研修場」がある。藩校入徳館の流れを汲む入徳館小学校ゆかりの地だ。キャンプ施設があり、自然体験や野外学習に活用されている。隣接する三根山藩址公園は、かつて藩邸があったところ。三根山藩址の碑や米百俵の碑などが立つ。



# 開府四百年のあゆみ

No.6

いまから四十二年前、「米百俵之碑」が  
大手通りに設置された



「米百俵之碑」除幕式  
昭和50年、国漢学校の跡地である大手通り2丁目に「米百俵之碑」が設置された。

## 国漢学校跡地のモニュメント

昭和五十年（一九七五）八月二十四日、「米百俵之碑」の除幕式が長岡駅前的大手通りで挙行された。長岡市は小林虎三郎没後九十九年の節目に、国漢学校跡地の石碑（現在のカーネーションシヨンプラザ前）を設置したのである。

以降の長岡市政は、虎三郎の「ひとづくり、まちづくり」の理念を活かした事業を様々な分野で展開していく。昭和五十一年の「小林虎三郎没後百年を記念するつどい」開催、平成七年（一九九五）



小林虎三郎の碑  
悠久山公園蒼葉神社参道にある小林虎三郎の碑。昭和5年に建立され篆額は牧野忠篤、書は高橋翠村の手による。

の長岡市米百俵財団設立、同八年の「米百俵デー」（六月十五日）と翌年の「米百俵賞」の創設などである。平成十年にスタートした「長岡の人材教育」は、「熱中！感動！夢づくり教育」事業に発展している。

平成十三年五月七日、小泉純一郎首相は所信表明演説で米百俵の故事を引用した。米百俵の故事は全国的に注目を集めることとなる。翌年には、郷土長岡の歴史と人物を振り返る「米百俵まつり」の第一回が開催され、市内全域を巡回する自動車文庫は「米百俵号」と改称された。

再開発が進み、さらに新しくなる大手通りにたたずむ「米百俵之碑」は、長岡市の未来を今も見つめ続けている。



自動車文庫「米百俵号」  
長岡市立中央図書館では平成14年に自動車文庫「ながおか号」から「米百俵号」と新たに名前を変えサービスを開始した。現在は2台体制で市内を運行している。



第1回米百俵まつり  
平成14年に始まった長岡の新しい秋の祭り。時代行列に公募で選ばれた市民が長岡ゆかりの先人に扮して行進。米百俵リレーや新米もちつきなど大手通りは5万人の人出でにぎわった。

# 千也がゆく

かずや

KAZUYA REPORTS

長岡藩  
ゆかりの地を  
巡る探訪記

第6回

萩編



長州藩の偉人を育て上げた  
「吉田寅次郎」  
長岡藩の存亡の危機を救った  
「小林虎三郎」  
その二人を「二虎」という  
黒船来航後の二人の教育論とは  
どんなだったのであろうか



松陰神社 吉田松陰を祭神とする神社

幕末に起きた日本を揺るがす  
内乱「戊辰戦争」  
長岡藩は大きな傷跡を残した。  
歴史の傷は今も有りか無しか？

佐久間象山は「松陰の胆略と虎三郎の学識、皆稀世の才なり。ただ天下に事を成すのは松陰で、わが子の教育をせしむべき者は虎三郎ただ一人である」と言い残している。

今回は小林虎三郎と二虎と言われた吉田松陰の痕跡を求めて行ってみました。吉田松陰は山口県萩市出身、そう萩は元々長州藩。長岡藩と長州藩は昔因縁の対戦があった。……  
同ったのは萩博物館、松陰神社、萩城跡、明倫館、野山獄、松陰墓地など。萩の町は、世界遺産はもちろん、歴史を残す遺産が沢山ある。更に偉人も多くその偉人を育てたのは紛れもなく松陰先生だろう。  
長岡には米百俵の精神などが受け継がれているが、萩にはどんなものが受け継がれているか、松陰先生の教育とはどんなものだったのでしょうか。明倫館小学校には「松陰先生のことば」というものがある。それを小学生は朗唱して教育を行っている。一年生は、始めは意味もわからず読んで暗記して解読する。これは松陰先生が松下村塾



秋の風景 シンボル指月山を映す夕日と街並み



萩博物館  
武家屋敷的な造りでいかにも城下町に建てられた建物だ。お会いしたのは萩博物館特別学芸員一坂氏  
開館時間 / AM9:00~PM5:00(最終受付PM4:30)  
休館日 / なし  
所在地 / 山口県萩市大字堀内355番地  
電話 / 0838-25-6447  
入館料 / 大人510円 高校・大学生310円  
小・中学生100円 (団体割引あり)

を行っている時からしている授業ではないか？講義、会議、対談、討論、策問をしていた、更に野外学習、武芸、などもしていたと言う。  
また「知行合一」実際と実践を重んじる授業。「至誠、心通わせて認め合い分り合い励まし合う教育。様々な考えのもとで松下村塾に集まった志士達が目的を抱き目標を掲げ、世に出たと言う事は至誠、知行合一の教育があったからだろう。  
その教育は今も続いている。萩に行ってみた。歴史が残っている。歴史に学び歴史を伝える。今は戊辰戦争の互いの傷跡はないと思う。町、海、川があり五万人の街が輝いて見えた。

執筆：石丸 千也 (いしまる かずや)

長岡で美容室を営み、自らスタイリストとしても活動中。長岡の歴史を通して郷土を考え、次世代に伝えたい、と熱き想いを持った若者が集う「越後RYO-MA倶楽部」の局長。「米百俵まつり」で坂本龍馬に扮している。



# 枝豆王国にいがた

## まぼろしの肴豆

枝豆の形をした新潟県は、枝豆消費量と作付面積が日本一！まさに枝豆王国だ。作付面積に比べ、首都圏への出荷量が少ないのは、地元の消費が多いから。六月から十月上旬にかけて、四〇種類以上の枝豆が出回るや、県民は茹でたての枝豆を

### 枝豆

県内では産地や収穫時期の異なる40種類以上の枝豆が登場する。おつな姫・湯あがり娘・新潟茶豆といった名前で市場に出る。写真は長岡野菜認定の一寸法師。



毎日、山のように食べている。

中でも、長岡野菜認定の「肴豆」と「一寸法師」は、九月中旬から十日間程しか収穫できないため、「まぼろしの枝豆」と呼ばれている。どちらも晩成種で緑色が濃く、抜群の香りとコクのある甘味が特長だ。

肴豆は昭和四十五年頃、長岡市関原方面の在来種を定着させたのが始まりで、ビールのにピッタリと命名。サヤは三日月形に反っている。

一寸法師は平成十五年に肴豆の中から、小ぶりで食味が優れたものを選び、種の選抜と栽培を繰り返して生まれたもの。サイズが一寸（三センチ）なので一寸法師と命名。一寸法師の出荷が終わる頃、肴豆が枝豆シーズンの大トリを飾る。

# 米百俵の「戯曲」

## 先人の心を伝える物語

昭和十八年（一九四三）に発行された山本有三作の戯曲『米百俵』は、小林虎三郎の長岡復興の故事を普及した。その内容は荒唐無稽の物語ではなく、長岡牧野家の藩政の「根本」をよく表現している。

長岡藩風のルーツ『参州牛久保之壁書』を見ると、始めに常在戦場の四文字があり、続く条目のひとつに「何事にも根本と云ふ事」と記されている。根本とは、長岡武士にとつて揺るがざる常在戦場の精神だろう。その常在戦場の精神が戯曲の要所に登場し、小林虎三郎の行動を支えるものとして書かれている。戯曲『米百俵』は発行当時のベストセラーだが、戦時下において自主回収を命じられ絶版になる。人間を尊重し教育を第一とするメッセージ



阪之上小学校6年生による英語劇「米百俵」  
6年間かけて長岡の歴史や文化を学び、「米百俵の精神」を伝えようと児童が熟演。

が、反戦的と読まれたのかもしれない。しかしその後数々の顕彰があり、「米百俵の精神」は長岡開府四百年の今日まで語り継がれた。「新しい米百俵」をテーマに打ち出すこの機に、先人の心を確かに未来へ生かしたい。

ROOTS  
400 越後長岡

長岡開府400年という節目の年を契機に我々の住む地域の歴史や文化のルーツを見つめ直そう  
平成30年は長岡開府400年

越後長岡ROOTS400 第6号 米百俵の精神

次号予告/三島徳二郎をめぐる人びと

発行/長岡開府400年記念事業実行委員会 平成29年10月1日  
平成30年3月20日 第2刷

編集/越後長岡ROOTS400編集会議 代表 稲川明雄  
石丸千也、恩田富太、星貴、渡辺千雅、長岡商工会議所、長岡市  
〒940-8501 新潟県長岡市大手通1-4-10(開府400年記念事業推進室内)  
Tel.0258-39-2395 Fax.0258-39-2272  
E-mail: kaifu400@city.nagaoka.lg.jp

制作/株式会社ネオス  
協力/元井達夫、興国寺、古田島吉輝、坂本保富、長岡高校記念資料館、  
長岡市立阪之上小学校、(一財)三根山有終団、萩博物館、松陰神社、  
松陰神社宝物殿 至誠館、長岡市立科学博物館、長岡市立中央図書館、  
長岡市立中央図書館文書資料室